

ら は た

TAHARA
History Inquiry
Club

探訪

歴史

クラブ

其の 81

縄文人から学ぶ

「助け合いのこころ」

吉胡貝塚史跡公園がついにオープンしました。皆さん、もうお出かけされましたか？

実際のところ、縄文人なんて昔の人……。だと思っている方が多いのではないのでしょうか。今回はその誤解を解くためにも、縄文人の意外な一面を紹介します。

吉胡貝塚の人たちのことを調べると、互いに助け合って暮らした彼らの姿が浮かび上がります。

平成17年の発掘で見つかった「5号人骨」と呼ばれる縄文人。小柄な40代くらいの男性です。縄文人にしてはあごがすつきりとした顔で、なかなかのハンサムでした。この彼、実は右足に障害があったのです。すねの骨が異常に細かったうえ、足の関節面にも異常があり、スムーズに動かなかったようです。その影響は右足全体にも及んでいました。「骨が細い」ということは、脚（足）が十分に使われていなかった、つまり、歩行が困難であったことが想像されます。また、それが長年にわたっていることも想像できることから、異常の理由の一つに「小児まひ」があったと考えられます。



異常に細い「5号人骨」の脚骨

「3号人骨」と呼ばれる60代の女性。彼女の腰椎は、下から4番目の骨が内側に激しくつぶれています。その角度を見ると、かなり腰が曲



「3号人骨」の腰椎（左）と正常な腰椎（右）

がった状態であったことがわかります。そのうえ、骨の端にはとげのような異常も見られます。この女性にはひざの関節部分にも異常があり、伸ばせなかったようです。ずいぶん足腰は弱っていました。

また、歯についても抜歯（当時の縄文人の風習）されたうえ、通常32本あるはずの歯が17本しかなく、残った歯も歯槽膿漏のためガタガタで、ものをかむのは困難であったと思われる。このような状態で十分な食事を取ることができたのでしょうか。

縄文人は、現代人よりもはるかに短命でした。一説では、当時15歳まで生きた人の余命は、15年程度であるといわれています。体力のない子どもは15歳を待たずして命を落とす



少ないうえにガタガタになっている「3号人骨」の歯

ことも多かったはずなので、紹介した2名はずいぶん長生きでした。現代のように、周囲のバリアフリー化が進み、社会環境が整っている時代ではなかった縄文時代。過酷な自然環境では、人間がそれに合わせて生きていく必要があります。障害があっても平均年齢以上に生きることができたのは、村人の手厚い支えがあったからなのでしょう。

皆が支えあう福祉の原点は、田原市民の祖先・吉胡貝塚の縄文人に、すでにあつたのです。彼らは、自然発生的に生まれた「助け合いのこころ」を、普通に持っていました。われわれも負けないようにしなければいけませんね。（増山）

文化財課 23局3531